

獅子舞に息づくご先祖様の鼓動

小西 豊

東京で最初のオリンピックが開催された年に、富山県生まれの両親の元、名古屋で私は、三人兄弟の末っ子として生まれた。

長男だった父は、結婚式や法事などの行事があるたびに富山に帰省した。座持ちがいいからなのだろうか、そのたびに父は、末っ子の私を連れて行った。

男の子の例にもれず、乗り物が好きだった私は、父との旅行が楽しみだった。お目当ては、米原まで乗る新幹線と、米原からの特急列車だった。

富山についてからの日々は、私にとっては戸惑いの連続だった。父とにこやかに談笑する親戚たちが話す言葉は、私にとって聞きなれないものだった。立山や劔に始まる山々や川はあまりにもたくまし過ぎて、私には手に余るものだった。山菜の煮物やべっこうなどの郷土食は、幼い私にとってはあまりにも大人の味だった。

富山の旅の締めは、ご先祖様への墓参りだった。墓前で手を合わせはするものの、会ったこともないご先祖様たちは、私からすればもうすでに死んでしまった人であり、特段の思い入れが生じる存在ではなかった。

鱒寿司や蒲鉾など、山のような土産を手にな古屋に向かう車中は、名古屋に近づくにつれて普段の言葉に戻る父の姿もあり、「これで日常に戻れる」という安心感があった。

時は流れ、東京で就職した私は、二〇〇五年の秋に、社会人向けに開放された大学院の講座で、魚津水族館の館長に出会った。自己紹介した私に、館長は

「もしかして本籍は魚津市の鉢ではありませんか」と言った。

まさにその通り。なぜわかったのかと尋ねると、館長は答えた。鉢には小西という名字が多いのだと。確かにその通り。続けて館長は、鉢では江戸末期から獅子舞が盛んに行われたこと、その獅子舞は近在の村から人々が集まるほど見事なものだったこと、そしてその獅子舞を支えたのが、私のご先祖様たちだったことを語った。

「鉢の小西が一度も獅子舞を見ないのは、ありえない事だ」館長の言葉に導かれて、私は翌年の春、魚津市松倉地域の人々が集う「のろしまつり」を見に出かけた。

まつりの終わり頃に、獅子舞は始まった。荒ぶる大自然を表す「獅子」に、「天狗」という若者が挑みかかるといふ物語だ。天狗は武術だけでなく、妖術も駆使して獅子を倒そうとする。緩急のある物語性に富んだこの伝統芸能は、子供の秋祭りで見慣れた「獅子舞」とは全く別物で、私はすっかり心を奪われてしまった。

舞そのものもさることながら、私が関心を寄せたのは、太鼓の役割だった。それぞれの舞が終わる時に、必ずリズムパターンを変えて演者や奏者に合図を送っている。演者は演者の、楽器奏者は楽器奏者の、それぞれの持ち場を守り、役割を果たして、獅子舞を作り上げている。これはすごいことだ、と私は思った。

「昔はこんなもんじゃなかったけどな」と一緒に獅子舞を見ていた叔父は言った。そして「あなたのお祖父さんは、太鼓の名手だったんだぞ」と続けた。

私は、高校の頃に同級生たちとバンドを組み、ドラムを叩くようになった。

吹奏楽団やオーケストラで打楽器を担当し、多くの舞台に立って演奏した。

社会人になってからも、時々友人の結婚式などでドラムの腕を披露することもあった。私にとって打楽器の演奏は自分一人で切り開いた道だと思っていた。

叔父の言葉は、会ったこともないご先祖様と私自身を結びつけた。

獅子舞という物語性に満ちた伝統芸能を、私のご先祖様は鉢の村に伝え、発展させた。戦争が終わってすぐにこの世を去った私の祖父は、太鼓の名手として認められていた。

そうか、ご先祖様たちは確かに生きていたんだ。

そして富山から遠く離れた名古屋に生まれた私は、高校時代にドラムに出会い、打楽器の腕を磨いていた。獅子舞については何も知らなくても、獅子舞を支える太鼓の響きについては何とか理解できる。獅子舞の鼓動を通して、私のご先祖様たちと話ができる。そう思うと、遠い存在だったご先祖様を、とても近しく感じられた。

まつりのあと、ご先祖様の墓前に立った私は、初めて心の中で話しかけた。「ご先祖様の獅子舞も見たかったよ」と。

ご先祖様とのつながりを実感した私の日常に、これといった変化は何もない。しかし、獅子舞を思い出すたびに心に響く鼓動は、ご先祖様は生きていたという実感を生み出し、確かに私を支えている。